

コクトー研究余滴

—— 『地獄の機械』の自筆原稿をめぐって ——

笠井裕之

研究とは孤独な営みである。対象と向かいあうときは、いつもひとりだ。作業がうまくはこんでいるうちは楽しく有頂天にもなるのだが、思わぬ困難が生じて立ち行かなくなると、たちまち暗闇に閉ざされ、ひとり呻吟する羽目になる。夢のなかでも、書こうとして、書けない。悪夢を繰り返して同居人にも迷惑をかける。それでも、天の配剤というか、僥倖というか、何かの拍子に思いがけず扉が開いて日が射しこむことがある。孤独を忘れることがある。そこに隠し扉があるとは思ひもしなかった意外なところで。

二〇一三年、特別研究期間にめぐまれてフランスに滞在した。この年は詩人ジャン・コクトーの歿後五十年にあたり、パリをはじめ各地でコクトーに関連するシンポジウム、展覧会、映画の上映会など、周年行事が目白押しだった。八月に南仏のトゥールーズを訪れたのは、まずは煉瓦造りの建物が美しいこの「薔薇色の町」で夏の週末を過ごそうと思つての

ことだった。同僚のナタリー・アンリさんはこの町の出身だから、ホテルやレストランなど現地の情報も事前に仕入れることができた。しかもコクトーの資料展を開催中の美術館がある。

トゥールーズの旧市街をめぐり歩いて、通りから奥まったところに、瀟洒な佇まいのポール・デュピユイ美術館を探しあてた。アンティークの時計やセラミックのコレクションで知られる美術館だが、特別展としてコクトーの舞台作品の自筆原稿を集めた「ジャン・コクトーの演劇」*« Le Théâtre de Jean Cocteau »* を開催している。小さな展示室に足を踏み入れて、愕然とした。存在しないと信じられてきた第一級の資料が、そこに、たしかに陳列されていたのだ。オイディプスの神話を主題とする四幕の戯曲『地獄の機械』*La Machine infernale* (一九三四年初演) の自筆原稿である。

『地獄の機械』の執筆時期に重なる一九三二年、コクトーはロマンノフ家の血をひく女性、ナタリー・バレと恋愛関係にあった。ところがコクトーと幼なじみで、ナタリーの友人でもあったマリー＝ロール・ド・ノワイユがこの恋に絡んで逆上するという出来事があり、コクトーから贈られた物品を自宅でことごとく損壊し、さらにコクトーのバリのアパルトマンにまで乗りこんで、そこでも同様な行為に及んだという。この騒動のなかで『地獄の機械』の自筆原稿も失われたというのが「定説」だった。校訂版としてもつとも信頼されているプレイヤッド叢書でも、この戯曲のテキスト註解の冒頭に「自筆原稿は現存しない」と明言されている。⁽¹⁾

その幻の自筆原稿が、なぜ、ここトゥールーズの美術館に展示されているのか。マリー＝ロールの騒動の顛末は、コクトー自身、『ポトマックの最期』*La Fin du Potomak* (一九三九年) で戯画化したエピソードとして用いているし、日記でも繰り返し回想している。ところがその記述をあらためて読み返してみると、『地獄の機械』の自筆原稿が破棄されたという具体的な記述は見あたらない。⁽²⁾ この原稿にまつわる「定説」も、コクトーという詩人の周辺につきまとった数多くの「風説」のひとつだったのか。あとになって判明したことだが、バレエ・リュスの最後の時期を支えたダンサーで振付家のセ

ルジュ・リファールの歴大なコレクションのなかに、実はこの自筆原稿が含まれていた。リファールが原稿を入手した経緯は不明だが、コクトーは『地獄の機械』のエディプ（オイディプス）役に一時リファールの起用を模索したことがあり、またナタリーはコクトーと出会う以前にリファールと親密な関係にあったから、こうした私的な経路が原稿の帰趨に関係していたのかもしれない。いずれにしても、リファールのコレクションは一括して二〇一二年三月、ジュネーヴで競売にかけられた。件の『地獄の機械』の自筆原稿は、ほかのコクトー資料とともにパリの書簡自筆原稿美術館 Musée des Lettres et Manuscrits が落札し、この私設美術館の所蔵となった。二〇一三年夏のポール・デュビュイ美術館の資料展「ジャン・コクトーの演劇」の開催はその翌年のことで、書簡自筆原稿美術館は新規収蔵品を貸し出して、お披露日の機会としたのだろう。

個人的にもこの『地獄の機械』自筆原稿の「発見」には格別の意味があり、文字どおり衝撃的な出来事だった。というのも、筆者はかねてよりこの戯曲の生成研究に取り組んでおり、しかもこの年の三月、フランスに出発する直前に、その時点での調査結果を——自筆原稿の存在を知らぬまま——論考にまとめて発表したばかりだったのである。研究の発端となったのは、三田の慶應義塾図書館に所蔵されている『古代』*L'Antiquité* と題されたコクトーのタイプ原稿だった。『地獄の機械』第二幕の初期形を示す草稿で、タイプされた印字に手書きの修正が加えられている。そもそも『地獄の機械』は全四幕が順を追って整然と執筆された作品ではない。最初に書かれたのは第二幕、つまりタイプ原稿『古代』に対応するテキストで、当初は単独での上演が想定されていた。その後、プロローグとして第一幕が書き加えられた。そしてしばらく間において第三幕、第四幕と、テキストが増殖するようにして書き継がれていったのである。執筆期間は断続しながら一九三〇年から初演の一九三四年まで四年間に及ぶ。慶應義塾図書館所蔵のタイプ原稿はその初期に位置することになり、とりわけ重要な資料的価値があるといえる。一方、フランスには、フランス国立図書館とパリ市歴史図書館に、そ

の後の各段階を示すタイプ原稿とメモ書き、関連する書簡などが所蔵されている。自筆原稿が「定説」通り現存しないのであれば、これらすべてを比較検討することで、とりあえず可能なかぎりの生成研究が成り立つのではないか——当時の筆者はそう思っていた。そして日本で、フランスで、図書館に通って調査を重ねたのである。ところがたまたま訪れたトールーズで、あろうことか事態は急展開を告げ、研究プランは一から出直しを余儀なくされた。ガラス一枚を隔てて展示ケースに並んでいる、この自筆原稿をなんとしても精査しなければ。

ポール・デュビュイ美術館での会期が終わり、展示資料の返却が完了する時期を見計らって、パリのサン・ジェルマン大通りにある書簡自筆原稿美術館に資料の閲覧を申し込んだ。私設の美術館ゆえ対応に不安があったが、手続はいたつてスムーズだった。原稿の閲覧はオリジナルではなく電子化された画像にかぎられたものの、文字の判読に支障はなく、むしろ難読箇所を自在に拡大できるので都合だった。この年の秋から冬にかけて、週に二、三度、美術館に通うのが習慣となった。日がな一日、原稿との無言の対話に明け暮れて、研究者としての幸福を感じていた。

ところがある日、親しくなったスタッフから不穏な噂を聞いた。この美術館は近く閉鎖されるかもしれない、という。どうやら創立者に組織的詐欺の嫌疑がかかり、美術館に捜査の手が及ぶのも時間の問題らしい。このスタッフはすでに転職の準備をはじめていた。最悪の事態を念頭に、とにかく閲覧可能なうちに仕事を完了しなければならない。作業のペースを速め、無理を言って原稿の複写を依頼した。複写は何回かに分けておこない、最終的に四幕のすべて、および関連する紙葉を網羅できたことは幸いだった。後日譚になるが、二〇一四年末に書簡自筆原稿美術館と関連会社に強制捜査が入り、翌二〇一五年に美術館は閉鎖された。貴重なコレクションのうち、ごく一部は国が差し押さえてフランス国立図書館の所蔵となったが、それ以外のすべては二〇一七年に競売に付され、その模様はインターネットで同時中継された。かけがえない資料が次々と落札され、散佚してゆく。筆者はそれを見守ることしかできなかつた。やがてコクトーの自筆原

稿の番となり、これも相当な額で匿名氏の手落ちた。その行方は研究者たちの間でも不明のままだから、やはり公的機関には収蔵されなかったのだ。これ以後、少なくとも自分のあいだ、資料へのアクセスの道はほぼ断たれたことになる。

二〇一四年三月、筆者は『地獄の機械』自筆原稿の複写と閲覧室で書き継いだノートを携えて帰国した。引き続きおこなうべき作業は明らかだった。自筆原稿の段階から複数のタイプ原稿の段階を経て戯曲の上演に至るまで、変遷を重ねたテキストの生成過程を記述するエディション・クリティック（批評校訂版）を作成すること。自筆原稿にはおびただしい修正の跡があり、消し線の背後の文言まで透かし見る必要がある。位置を移してテキストをモザイク状に組み替えている箇所もある。コクトーの筆蹟には馴れているつもりでも、どうしても判読できない箇所は少なかつた。しかも読みこめば読みこむほど、その数は蓄積されてゆく。そんなとき、手をさしのべてくれたのは同僚のナタリー・アンリさんだった。五時限目の授業のあと、原稿の画像に二人で目を凝らして、難読箇所を解説にあたった。筆者がもはやこれまでと匙を投げた箇所でも、驚くべき集中力で正解を探りあててくれた。困難な作業に最後まで並走してくれた彼女に深い感謝を捧げたい。そしてエディション・クリティックの最初の試みがようやく形になったのは、二〇一六年のことだった。⁽⁵⁾ もちろん、さらなる修正を反映したアップデートは常に必要であるし、テキストの変遷が作品にもたらしたものを抽出し、あらたな作品の解釈を提示することも求められている。筆者にはそれをおこなう責任があるし、もとより研究に終着点はないのだから。

ほかならぬ慶應義塾図書館に貴重なタイプ原稿が所蔵されていたこと、失われたはずの自筆原稿にトゥールーズでめぐりあえたこと（ナタリーさんの導きの糸があったのか）、その自筆原稿が閲覧可能だった短い期間に折よくフランスに滞在できたこと――。研究とは孤独を強いる過酷な試練に違いないけれど、偶然の重なりと身近な人の後押しがあつて、はじめ形をなすということもある。筆者は得がたい幸運にめぐまれていたのだと、あらためて思いを深くするのである。

- (1) Gérard Lieber, « Note sur le texte », *Œuvre complètes*, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 2003, pp. 1682-1694.
- (2) Jean Cocteau, *Journal, 1942-1945*, Gallimard, 1989, pp. 236-237 [13 janvier 1943]. *Le Passé défini*, tome I, Gallimard, 1983, pp. 291-292 [29 juillet 1952].
- (3) 「ジャン・コクトー『地獄の機械』の生成過程に関する覚書」〔『教養論叢』第一三三、三四号、慶應義塾大学法学研究会、二〇一三年三月〕。
- (4) マルキ・ド・サドの『ソドム百二十日』とアンドレ・ブルトンの二つの『シュルレアリスム宣言』の自筆原稿。Marquis de Sade, *Les Cent Vingt Journées de Sodome*. André Breton, *Le Manifeste du surréalisme et Le Second manifeste du surréalisme*. いずれも二〇一一年、正式にフランス国立図書館の所蔵となった。
- (5) 「ジャン・コクトー『地獄の機械』の生成論的研究に向けて——執筆過程と現存する草稿の検証」〔『教養論叢』第一三七号、慶應義塾大学法学研究会、二〇一六年〕。「ジャン・コクトー『地獄の機械』の生成論的研究に向けて——エディシヨン・クリティックの試み(1)／(2)」〔『慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学』第六二／六三号、慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会、二〇一六年三月／十月〕。

鶴崎明彦さんの思い出は尽きません。パリに留学中の鶴崎さんのアバルトマンには、同じ建物にかつて住んでいた十九世紀の詩人パンヴェイルや、そこを訪ねたにちがいないランボオの影が去来していました。そして店を梯子して二人で痛飲したこと、気おけない仲間たちとドイツ、フランスを車でめぐったこと……。どうかいつまでもお元気で。